

特集にあたって

佐藤 幸人

三国志の愛好者には説明するまでもないが、特集のタイトルにある「臥龍」^{がりよう}とは諸葛亮孔明のことであり、「鳳雛」^{ほうすう}とは龐統士元のことである。ともに劉備玄徳に軍師として仕えたが、世に出る前、その大器をこのように称されていた。この特集では、発展途上国や新興国で今後、プレゼンスを増しそうな臥した龍、鳳凰の雛にアプローチする。

この特集の書き手たちは、発展途上国や新興国に深く入り込み、社会のトレンドを探っている。探索のなかで、これから大きな影響力を発揮しそうな人物が目にとまることもある。ここで取り上げた人たちは、劉備の三顧の礼に応じて出陣する前の諸葛亮と比べれば、既にそれぞれの国や領域でその名を広く知られているが、日本ではまだ一般にあまり知られていない、そして将来さらなる活躍が期待される面々である。

●16年前の「新しい世紀を駆ける人々」を顧みる

といっても先を見越すことはなかなか難しい。『アジア研ワールド・トレンド』では16年前、2001年3月号で「新しい世紀を駆ける人々」という特集を組み、11カ国の11人と1組の人物を取り上げた。今から振り返ると、その後、期待していたほどには活躍しなかった人も少なくない。わたしが取り上げた殷琪という台湾の女性企業家は、親から受け継いだ大陸工程という建設会社の会長は今も続けているが、自らが設立を主導した台湾高速鉄道の経営からは2009年に退き、その後は目立った動きはしていない。

一方、韓国の2人のベンチャー企業家について書いた安倍誠は慧眼だった。企業家の1人のアン・チョルスはその後、政界に転じ、先日の大統領選挙では、最後は第3位の得票に終わったものの、支持率は途中まで当選したムン・ジェインに肉薄していた。

半分負け惜しみになってしまうが、見通しが外れたから意味がないわけではない。なぜ、現実の展開が見込みとは違ったのかを考えることで、その社会に対する理解を深めることができる。わたし自身についてい

えば、殷琪の活躍の前提として暗黙に想定していた民進党政権の安定や、社会の進歩に対する党派を超えたコンセンサスと支持が、実際にはいかに脆弱なものであったかを思い知らされることになった。

●新しい時代の龍や鳳凰を探して

2001年の特集で取り上げた人物は政治家と企業家ばかりだった。南アフリカの判事がやや毛色が違ったくらいである。今回も7カ国8人中、政治家3人、企業家2人が多い。しかし、フィリピンの障害者のリーダーと、ブラジルのユーチューバーのカップルもいるところが、16年前の特集にはない新しさである。

こういった人たちの取り上げたのは、一面では社会の変化の現れである。二宮康史がブラジルの候補として、ユーチューバーのプリッチ&ローガンを示してきたとき、「これはいい」と思った。2001年にブログは既にあったが、ブロガーを政治家や企業家と並べるような発想は誰からも出てこなかった。二宮のあげた候補には政治家もいたが、迷わず2人について書いてほしいとお願いした。他面、意図的に新しいタイプの人物に目を向けようとした。山形辰史に紹介したい社会活動家はいないかと尋ねたら、是非、フィリピンのアブナール・N・マンラパスについて、森壮也と書きたいと言ってきた。これはわたしたちの視野の広がりをもたらした成果である。

この特集の読み方は読者しだいだが、一つのオプションとして、社会の変化を観察するフォーカスとして読むことをお勧めする。上でも述べたように、彼／彼女たちの今後は、その置かれた環境にもかかっているからだ。期待したような活躍ができない場合、環境が変わってしまったからかもしれない。さらに、もしかしたら彼／彼女たちが環境を変えていくのをウォッチできるかもしれない。誰かが将来、赤壁に東風を吹かせるならば、これほど痛快なことはない。

(さとう ゆきひと／アジア経済研究所 新領域研究センター)